

## A Short Chat

## Apichatpong Weerasethakul / Thailand アピチャポン・ウラセタクル / タイ

タイの大学で建築学を学んだ後、シカゴ芸術学院の大学院で映像を学ぶ。山形国際ドキュメンタリー映画祭 2001 に参加し、Mysterious Object at Moon/ 真極の不思議な物体には2つの責を受賞。イスタンブールビエンナーレ、エゴプーガル・イスタンプーと ビーン・レ東京に参加、札幌での作品制作は、東京在住の映画評論家、地元の映画監督とのコラボレーションを含め5つの映像をICC のホールにて上映、その後、バリのJalak do Tokyo にてレジデンスに参加。また、世界中を行き来しての活動となっている。

On the last night of my stay in Sapporo, at ree Space Praha, my farewell party was given. Numerous people attended (many of whom I didn't even know). Despite my objection, S-AIR director, Shibata-san asked me to say a few words. I am so shy with people. All I could say was, "I am overwhelmed by the warmth here. I don't know what to say. Thank you." I was quite awkward. But come to think of it now. I could not express my feelings with any word better than "Thank You."

When I was in Thailand, I was determined to come to study the nature of Japanese dramatic elements. I followed my instinct to articulate my Haunted Houses project, I was trying to discover and understand narrative modes found in Japanese culture. I was looking for a form of addiction. I started with an easy target - a soap opera. Gradually. I shifted my interests to other shows that display a more addictive power. I found that game or investigative shows had a tremendous draw-in power. These shows involve several personalities (and genders), the viewer can identify him/herself with at least one person on the panel. So watching TV Is a social experience at this point. Unlike the popularity of soaps in Thailand, where the viewers are indulged in personal fantasies, Japanese TV aims for "simulated" social interactions.

However. I thought it would be a waste of time to sit in front of a TV all day while there

However, I thought it would be a waste of time to sit in front of a TV all day while there, were so many mysteries to encounter outside of my Kotoni apartment. I had to choose between two opposite choices: real social encounter and personal art interest. Obviously the first won over. I was not interested in "simulated social interaction" on TV. So I went out.

The next discovery was that it was almost impossible to communicate in English with most Japanese people. Although, being outside in Odori park, seeing the different faces and gestures was a happy enough experience for me. My curiosity about people's happiness in this quite uniformed society began to build. Since there was a language problem, I was finding ways to communicate with people without having to meet face to face. I initiated the "Are you Happy?" balloon Project. Even though the result was not the best, it was the starting point for my other

Balloon events in other countries.

Another project began after I got to know more "unique" people. I started to sketch their faces and record their stories on videos. Later, in another piece. I was so tired and overwhelmed by the numerous stories. I switched to a "silent narrative" project. (A note: I think Masumi and Fumiyo were so great, they could be movie stars if they wanted to...)

The most moving event, however, came with

The most moving event, however, came with Sato-san. For me, she was always very quiet and reserved like most of the other Japanese I knew. But, on the last week, she seemed to open up. Out of the blue, she said something like. "When the artists leave, all becomes quiet. It happened when Paul and Sebastian left for Europe, and when your group leaves. I will feel lonely." My brain didn't function for a moment. I was so touched by her words. Then I thought my time in Sapporo hed become extraordinary, because finally I felt connected. I felt my true happiness of being invited as an S-AIR artist through this simple expression. And just then... I didn't need to make "art" here anymore. I felt it was completed.

However, I don't believe in the words "cultural exchange", it's bullshit. (That was only in my proposal application to get here. I admit it, I lied.) It is superficial to say, I truly absorbed a different culture in such a short stay. What I experienced with S-AIR. I believe was not a real Japanese culture anyway. It is a culture of outsiders who dedicate themselves to the arts. It angered and puzzled me to learn how little the staff get paid, and the fact that they had to find side jobs. (You wouldn't submit this report to the government, would you, Homma-san? You should I.)

This ugliness aside, I have never felt this grateful to people, in this short a time. In Sapporo for me, living is more important than creating art. I assume this applies to other places I go as well. S-AIR essentially confirmed my conviction.

Apichatpong Weerasethakul November 9, 2001 ANA NH 153

## A Short Chat ちょっと一門

札幌での最後の夜でした。場所はフリースペースプラ ハ、私のためのお別れ会をひらいて頂いたのですが、ず いぶんと大勢の方にいらして頂ました(中には顔に見覚 えのない方もいらしたようですが)。あんなにお断りし であったにも拘らず、柴田さんに一書皆さんに接野りと いうことでした。私は人前で番すのが大震変手化もので すから、ようやく「札幌の皆さんには、大変変お世話にな リました。なんとお礼を言ったらよいのか分かりま杯 し、とにかく有難うございました。」と言うのが精 した。ですが今思い返しても、「有難うございました。」と言うほか、自分の気持ちを言い表せる言葉が見つかり \*\*\*

私は毎間であるタイに居りました時、日本のドラ東 作り方を勉強してみようと決心しました。そこで、 に自分の気持ちに従い、『幽霊屋敷』と言う自分のプラと リジェクトとました。切り口はどうしまうと考えて、『思マ シェクトとました。切り口はどうしまうと考えて、『思マ シェクトとました。切り口はどうしようと考えて、『思マ シェクトとました。切り口はどうしまうと考えて、『思マ シェクトとました。「他のでは、 に取り付かれた人』を思いつき、手始めにメリしずつやっと とパワーのあるテレビ番組、バラエティー器程を映っつかっ出 とパワーのあるテレビ番組、バラエティー器程を映っつかっ がラエティーを掲出、パラエティー器をいったのかのから がランティーのですが、ゲームや、何かの調査の過程をいうこのかの がランラました。何かの課題というこのかのから 気であると、そこに出演しているタンクターの特ちにない まます。そういった点に於いて社と参加していドラウ るようで、何らかの形で自分がとかかりは、日本では、現ま なったのかもしれません。タイで人気の白屋を がいたったのかもしれません。タイで人気の白屋を がいたったのかもしれません。ターでので くの人間は、メロドラマの中で自らの白屋互換性が見ら いたったのかりは、日本では、現実との相互互換性が見ら

しかし日がなテレビの前に座っているのは、その頃住 んでいた弩似のアパートの周辺で起こる様々な出会い の面自みから比べると、なんという時間の浪費であるか ということに気付くまでそんなに時間はかかりませき でした。そして次に「自分は本当の意味の現実にきるう べきかそれとも個人的なアートの世界に引きこのもる べきか』という二者選択を迫られるに至りました。明ら かに自分の中では前者の勝ちです。そこで私は街に出る とにしました。テレビの中の見せかけの現実との決別 です。

しかしそこで悲しい発見をしてしまいました。日本の 方と真のコミュニケーションを回ろうとするには、日本 話ができないと無理なのだということです。それでもな おかつ、ただ大通公園のベンチに座り、様々な人びとの ありようを観察するだけでも非常に有意義な時間を通 でせました。次の自分の関心事は、『この、一見単一化し て見える日本の社会で、人々の幸福とは何なのか』とい うことに移ります。言葉の繋がありますから、何とか言 楽を用いずに、礼幌の方たちと接することはできないか と考えた末。『Are you happy? バルーンプロジェクト" を立ち上げました。たとえ結果が思惑通りには行かな かったとは言え、これからも他の国において続くだろう 風鉛プロジェクトのいい足がかりになりました。

次に新たなプロジェクトは[よりユニークな]人々に 会ったことから始まります、私は様々な人々の顔を、ス ケッチするようなつもりでビデオに納め始めました。し かしこれも話が止め処もなく増えて、結果『静かなる語 り部』プロジェクトに切り替えることになりました。(こ のときビデオに出演いただいたますみさん、文江さん、 あなたたちは、その卓越した存在感で、素晴らしい役者 振りでした。映画俳優も夢じゃありませんよ。)

しかし私が最も心を動かされた出来事は佐藤さんのことです。彼女はいつも蓄敵で、ほかの日本人の方のように控えめな方です。とってが後1週間でお話をするという頃になって、少しずつ打ち解けてお話をするよいう頃になって、少しずつ打ち解けてお話をすった。でれまで一機に活動していたアーティストが日本をやてにすると事務所は静かになってしまいます。ボール・そうでしたが、あなたたちがまってしまったときさればと言いなります。」それを聞いて私は一瞬な私と言葉はして良いのか分かりがりませんでした。『札札幌に添らかされていたのです。そして感じました。『札札幌に添らしてついにこの土地と真の意味で関われたのだから。』。の瞬間、8人名保を通して札幌に招待されたことの本当ストとしての仕事は終わりにしよう。何故ならここで仕事は終わりにしよう。何故ならここで仕事はまわりたしたのだかららい。これにいる。そして『この土地でのこれでは、それにいる。それにいる。それにいるこれでは、それにはいるこれでは、それにいるこれでは、それにいるこれでは、それにいるこれでは、それにいるこれでは、それにいるこれでは、それにいるこれでは、それにいるこれでは、それにいるこれでは、それにいるこれでは、それにいるこれでは、それにはいるこれでは、それにいるこれでは、それにはいるこれでは、それにいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれではいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれではいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれではいるこれではいるこれではいる。これではいるこれではいるこれではいるこれではいるこれではいるこれではいるこれではいるこれではいるこれではいるこれではいるこれでは、それにはいるこれでは、それにはいるこれではいるこれではいるこれではいるこれではいるこれではいる。これではいるこれではいる。これではいるこれではいるこれではいるこれではいるこれではいる。これではいるこれではいるこれではいるこれではいる。これではいるこれではいる。これではいるこれではいる。これではいるこれではいる。これではいるこれではいる。これではいるこれではいるこれではいるこれではいる。これではいるこれではいる。これではいるいるいる。これではいるこれではいる。これではいるいる。これではいるこれではいる。これではいるこれではいる。これではいるこれではいる。これではいるこれではいる。これではいるいる。これではいるこれではいる。これではいる。これではいる。これではいるいる。これではいるいるいる。これではいるいるいる。これではいる。これではいる。これではいるいる。これではいる。これではいる。これではいるいるいる。これではいる。これではいる。これではいる。これではいる。これではいる。これで

「文化交流」と言う言葉は何か空々しくて、好きでは ありません(実はこの企画に応募する際の動機に使わせ てもらいましたが、すみません。うそをついていまし な、に深け込めるわけがないじゃありませんか。仮にそ 文化に溶け込めるわけがないじゃありませんか。仮にそ がからARを介して短順見た日本の文化は決して真の姿で はなかったでしょう。それはアートに関わる人間が、ア ウトサイダーの視点から垣間見たものに過ぎないので チ。ここのスタッフが薄鉛で量を、副葉となして生た を営んでいることには怒りと当感を覚えずにはいられ ません。これは公の場には出されませんよね?本間さ ん、いえ、是非提出してください。 それはさておき、私はよれほど短期間の滞在であった

せれはさておき、私はよればと短期間のが伸生であった にも関わらず、札幌の皆さんには本当にお世話になり、 心から感謝しております。札幌に住み、芸術以前に生活 することの大切さを感じました。そしてこのことは、こ れからどんな土地に行き暮らすことになっても、変わら ないことのように思います。SFARがそれを確信させて くれました。

アピチャポン・ウェラセタクル November 9, 2001 ANA NH 153